


 書評

Muskin PR 原書編集, 高橋三郎 監訳, 染矢俊幸, 北村秀明,
渡部雄一郎 訳

DSM-5® 診断トレーニングブック

診断基準を使いこなすための演習問題 500

井上 猛

1980年にDSM-IIIが登場してから、従来診断とDSM診断(ICD診断も含む)の比較、両者の優劣に関する論争が続けられてきた。両者を中立的に考えてみると、精神科診断における重要な問題点、特に診断論理の特性に気付かされる。したがって、論争はとても意味があったと思う。

従来診断では精神疾患の診断基準はややあいまいであり、診断は個々の精神科医の裁量・力量に任される部分が多く、診断の一致率に問題があり、従来診断を研究に用いることは難しかった。しかし、その良い点は階層原則を設けて、器質性→内因性→心因性の順番に優先順位をつけて診断することを推めていることである。一方、個々の疾患のDSM診断基準を『DSM-5®精神疾患の分類と診断の手引』で読んだだけではDSMが階層原則を考慮しているのかどうかは分かりづらいが、たとえば『DSM-5®鑑別診断ハンドブック』の「抑うつ気分の判定系統樹」を読むと、実はDSMも階層原則を考慮していることが分かる。

従来診断に比べると、DSMでは診断の規則が細部にわたって決められており、個々の症例における診断の手引きを提供してくれる。したがって、入門者には分かりやすいし、研究者同士の間の合意も形成しやすい。一方、診断基準を作成・変更する際にはその根拠を挙げなくてはいけないので、絶えず研究と議論が必要である。私の恩師である故山下 格先生が指摘されたように、DSMの診断基準の細部を漏らさず読むことは非常に重要である。『DSM-5®精神疾患の分類と診断の手引』だけを読んで、DSMを理解したと考えてはいけない。『DSM-5®精神疾患の診断・統計マニュアル』と『DSM-5®

鑑別診断ハンドブック』を読んで初めてDSMを理解したと考えるべきである。両者には精神疾患のエビデンスと診断についてのとても重要な情報が書かれており、両書を読むことによりDSMの真髄を知ることができる。さらに、DSM-IIIからDSM-5®にかけてどのようなエビデンスが蓄積されてきたのかが分かる。だてに『マニュアル』のページ数が増え続けているのではないのである。たとえば、DSM-5®から初めてうつ病の危険因子の気質要因として神経症的特質が指摘された。DSMの考え方は実に慎重であると思うし、何がエビデンスなのかを我々に教えてくれる。

前置きが長くなったが、本書『DSM-5®診断トレーニングブック』では、問題を解いて、解説を読みながら、DSMが30年以上蓄積してきたエビデンス、DSM診断のエッセンスを学ぶことができる。しかも、解説を読むことにより、『マニュアル』からは読み取りきれなかった微妙なニュアンスも知ることができる。また問題に関する情報が『マニュアル』のどこに書かれているか、該当のページが丁寧に記されているので、本書を通して『マニュアル』の重要性を知ることができる。DSM-5®を理解したいと考えている臨床家・研究者や専門医を目指している方には、時々本書の問題にチャレンジして、読了することを薦めたい。そして本書をきっかけに『マニュアル』と『鑑別診断ハンドブック』も是非熟読してほしい。

(東京医科大学精神医学分野)

●A5 400頁 2015年5月 定価: 本体4,800
円+税 医学書院刊